



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	廈門における魯迅（遺稿）：魯迅伝覚書
Author(s)	猪俣, 庄八
Citation	北海道大學文學部紀要, 17(2), 1-29
Issue Date	1969-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33335
Type	departmental bulletin paper
File Information	17(2)_P1-29.pdf



厦門における魯迅（遺稿）

——魯迅伝覚書——

猪俣庄八

厦門における魯迅

——魯迅伝覚書——

猪俣 庄八

目次

(一) 北京脱出

(1) 「三・一八」惨案

(2) 訳業

(二) 厦門行

(1) 厦門大学の現状

(2) 生活の岐路

(3) 辞職

(三) 結語

北大文学部紀要

(一) 北京脱出

(1) 「三・一八」惨案

一九二六年(民国十五年
大正十五年)、魯迅四十六歳のこの年、まず許寿裳編「魯迅先生年譜」(魯迅全集復社版附録
「以下一年譜と略称」)には「二月女子師範大学恢復、新校長易培基就職、先生始卸卻職責。同月教育部僉事恢復、到部任事。」とみえる。いわゆる「女師大事件」に就いては前稿(魯迅伝覚書⁽¹⁾
大文学部紀要⁽²⁾「北」)にそのあらましを述べたが、その後の経過を「魯迅日記」に據って参照すれば、一月十三日の条に「上午赴女師大校長歡迎會」とみえる。つまり、この日に新校長易培基の歡迎會が開かれ、魯迅もそれに出席、かくして校務維持会の職責も解けたわけである。ついで、教育部僉事の職に復帰したのであるが、これに就いては「魯迅日記」一月十八日の条に「下午往教育部」とあるのが対応される。

以上をもって「女師大事件」はようやく結着をみたのであるが、それによつて章士釗、陳源ら「現代評論」派の反撃がそのまま鋒を収めたわけではもちろんない。それら「現代評論」派と魯迅の間に依然として論戦が展開されたことは、たとえば「華蓋集統篇」等に収められた雜感を通して充分に察知される。

ついで、「年譜」には、「三月、「三一八」惨殺案後、避難入山本医院、德国医院、法国医院等、至五月始回寓。」とみえる。このいわゆる「三・一八」惨案の経過のあらましはおよそ次の如くである。この年三月十二日、中国領海内の大沽口に日本の軍艦二隻が侵入し、奉系軍閥を援護して馮玉祥の率いる国民軍に砲撃を加えた。国民軍もこれ

に反撃したが、日・英・米・仏等八カ国は辛丑條約を援用して中国政府に最後通牒をつきつけ（十六日）、国民軍の撤退を要求した。これに憤激した北京の学生を主体とする群衆が示威運動を展開（十八日）し、國務院前に至るや、その徒手請願の群衆に對して発砲、おびただしい死傷者を出した。⁽²⁾ その時慘殺された犠牲者のなかに劉和珍（北京女師大⁽³⁾ 学生自治会主席）及び楊德羣がいた。

その日、魯迅はたまたま章士釗（執政段祺瑞の秘書長）、陳源ら「現代評論」派に對する雜文「無花的薔薇之二」（「華蓋集統篇」）を執筆中であつた。おそらくその途中に彼は「三・一八」慘案の悲報に接したのであらう。彼の筆は『已不是写什麼「無花的薔薇」的时候了。』と反転し、ついで『現在、聽說北京城中、已經施行了大殺戮了。當我写出上面這些無聊的文字的時候、正是許多青年受彈飲刃的時候。嗚呼、人和人的魂靈、是不相通的。』と慨歎する。以下その時の魯迅の悲憤痛烈な感慨を彼自身の文字を通して窺うことにする。

『中華民國十五年三月十八日、段祺瑞政府使衛兵用步鎗大刀、在國務院門前包圍虐殺徒手請願、意在援助外交之青年男女、至數百人之多。還要下令、誣之曰「暴徒」！』

如此殘虐險狠的行為、不但在禽獸中所未曾見、便是在人類中也極少有的、……

中国只任虎狼侵食，誰也不管。管的只有幾個年青的学生，他們本應該安心讀書的，而時局漂搖得他們安心不下。假如當局者稍有良心，應如何反躬自責，激發一点天良？然而竟將他們虐殺了！……中国要和愛國者的滅亡一同滅亡。……如果中国還不至于滅亡，則已往的史實示教過我們，将来的事便要大出于屠殺者的意料之外！

這不是一件事的結束，是一件事的開頭。墨写的謊說，決掩不住血写的事实。血債必須用同物償還。拖欠得愈久，就要付更大的利息！』

ついで彼はこの一文の最後を『三月十八日、民国以来最暗黒的一天、写。』と結んだ。

この「三・一八」惨案が彼に与えた衝撃の深さは彼がこの日を『民国以来最も暗黒の日』と記していることから察せられる。徒手請願の群衆に対して砲火があげられようとは魯迅にとつてまさに『實在沒有夢想到』（「空談」―「華蓋集続編」）ことであつた。あり得べからざることがあり得る事実として示されたとき彼がいかに悲憤に燃えさかつたかは想像に難くない。「無花的薔薇之二」の後半はそのような彼の悲憤の文字の結晶と読みとれる。『血債は必ず同一物をもつて償還されねばならぬ。支払いが遅れば遅れるほど、高い利息を払わねばならぬ！』という、その血債とはなにか。血の債務である。血債を支払うべきものは勿論彼が屠殺者と呼ぶ反動者である。その反動者に血債の償還をせまるこの文字は魯迅の胸底より噴出したそれであろう。魯迅の文章にはもともと感情の直截的な表現あるいは胸中の鬱屈の露出的な表明は決して多くはなく、このような激越な文章を彼のその他の述作に求めることは必ずしも容易ではない。この事件によつて彼が蒙つた傷痕の深さが思い知られよう。その時、彼はまさに「手負いの獅子」の感がある。なお、この事件に対する魯迅の悲憤は反動的な政府当局はもとより、ひそかにこれを支持し、冷笑的態度をとつた「現代評論」派にも向けられていたことは「空談」（「華蓋集続編」）に章士釗、陳源を名ざして非難していることから窺える。

さて、この「三・一八」惨案後に難を避けて山本医院、^{ドイツ}德国医院、^{フランス}法国医院等に入り、五月に始めて寓に帰る（「年譜」）とみえる、その経過のあらましは次の如くである。

すなわち、翌十九日に段琪瑞政府からいわゆる『暴徒首領』という名目で徐謙ら五名に対して逮捕令が発せられ、⁽⁴⁾ついで二十六日付の「京報」に総計四十八名にのぼる氏名が公表されたが、⁽⁵⁾その中に魯迅（及び許寿裳ら）の名があ

った。魯迅はその前日二十五日に北京女師大で挙行された劉和珍、楊德羣の追悼会に出席している（「記念劉和珍」が同日書いた「死地」（「華蓋集続編」）はその痛ましくも生々しい追悼の辞とも読みとれよう。それはともあれ、魯迅の避難はこの逮捕令によるわけであるが、彼の入院及び帰寓の期日をそれぞれ「魯迅日記」に参照すれば、三月二十九日山本病院に入り、四月十五日德国病院に移り、二十六日法国病院に移り、五月二日寓居（西三条胡同二十一号）に帰っている⁽⁶⁾。

なお、この避難の期間中魯迅はひたすら病院に蟄居していたわけではなく、学校の講義に出向いており、北京大学、中国大学⁽⁷⁾、女子師範大学⁽⁸⁾、また時おり様子をみに帰宅していたことなど「魯迅日記」によって知られる。従って、この逮捕令なるものも一般通念的に理解されるほど嚴重なものではなく、もちろん多分の危険性ははらみながらもかなり政策、政略的な追放令程度の内実のものではなかったかと推察される。

(2) 訳業

ついで、「年譜」には「七月起、逐日往中央公園、与齊宗頤同訳小約翰。」とみえる。魯迅がみずから『象徵写真の童話詩、無韻の詩、大人の童話』（「引言」―「魯迅訳文集」第四卷）と呼んだ、この「小約翰」（「小ききヨハネ」オランダ、ヴァン・エーデン原作）を友人の齊宗頤（寿山）と共訳⁽⁹⁾（ドイツ語か）したのは、「魯迅日記」を参照すれば七月六日の条に「下午往中央公園、与齊寿山開始訳書。」とみえるのが始めてあり、以後ほとんど毎日公園に通いつづけたが、それが完了したのは八月十三日で「往公園訳へ小約翰」畢。」とみえる。この翻訳の経過等については「引言」に詳細な説明がある。それによれば、魯迅がこの書を始めて知ったのは一九〇六年、日本留学時代で、東京神田

の古本屋でたまたま購入した“Das literarische Echo”（『文学的反響』、一八九九年八月一日出版）に「小約翰」の紹介があり（そこに「小約翰」訳本の標本が載っていた）、それに感銘して南江堂、丸善書店に行ったが、その本がないので丸善に依頼してドイツから取寄せてもらった、というわけである。これに関連して、当時魯迅と一緒にいた許寿裳も『……有意把它（「小約翰を指す」筆者）」訳成中文、発願很早、還在留学時代、而訳成則在二十年以後。』（『雑談翻訳』——「亡友魯迅印象記」）と述べている。魯迅自身もそのことにふれて『……這是一本好書、然而得来却是偶然的事。大約二十年前罷、我在日本東京的旧書店頭買到幾本旧的德文文学雑誌、内中有着這書的紹介和作者的評伝、因為那時剛訳成德文、觉得有趣、便托丸善書店去買来了；想訳、沒有這力。後來也常常想到、但是總被別的事情岔開。……』（『引言』に「馬上支日記」を引く）と述べている。なお、魯迅が始めてこの書を知った一九〇六年というのは、彼が仙台医專を退学、東京で文学運動を画策していた頃であるが、彼がこの書に愛着をもった理由としては許寿裳が『魯迅訳「小約翰」』也是一部力作。本書的著者荷蘭望・蕩單、本来是研究医学、具有広博的知識、青年著作家的精神的領袖、魯迅の学力很有些和他相似、所以生平愛読這部象徵写实的童話詩。』（『雑談翻訳』）と述べているのが参照されよう。さらに、魯迅が共訳者に齊寿山を求めた経緯などについては「今年又記得起来、翻檢一過、疑難之处很不少、還是沒有這力。問寿山可肯同訳、他答应了、于是開手、並且約定、必須在這暑假期中訳完。』（『引言』）と述べている。なお、原書の動植物その他訳語についての苦心など、魯迅一流の翻訳に対する細心緻密な態度についてはやはり許寿裳もそれを特記している（『雑談翻訳』）が、それは訳書に附録した「動植物訳名小記」を参照することによっても充分に窺われる。

なお、この年八月二十二日に魯迅は北京女子師範大学で講演を行なっている。これは女師大学生会が『毀校周年紀

念』のために行なったものであるが、向培良⁽⁹⁾による講演筆記がいま「記談話」として「華蓋集統編」に収められている。その内容は、簡言すれば、すでに廈門行を決意した魯迅が、かつて翻訳出版した「労働者セヴェリヨフ」などを例にあげながら、将来に対する希望を失わぬよう女師大生に勧告したものである。この魯迅の勧告は彼の「附記」に『……后来看見北京九月五日的晚報，有一條道：『今日下午一時半，任可澄^(教育總長)（^{一筆者}）同林氏^(林素園、師範部學校長)，並率有警察廳保安隊及軍督察兵士共四十左右，馳赴女師大，武裝接収……』とみえるように、「女師大事件」解決後わずかに一年余にして再び武裝接収される事態をひかえてのそれであつたわけである。

(二) 廈門行

(1) 廈門大学の実情

ついで、『八月底離北京向廈門任廈門大学文科教授。』（「年譜」）とみえる。魯迅が北京を去つて廈門へ行つたのは、いわゆる「三・一八」惨案以後の、進歩的教授文化人に対する逮捕令等をはさんで当局の監視、弾圧がいよいよ加重され、もはや北京にふみとどまることを不可能にしたからであろう。魯迅は、かくて、廈門行を決意したのであるが、彼が廈門大学文科教授として赴任するについてはこの時魯迅と同行し、廈門大学での同僚として過した羅常培が『……魯迅先生和我們一班人，從「三・一八」惨案以後，實在忍不住北洋軍閥黑暗勢力的压迫，很想找一塊清靜的地方，暫時躲避起来作學問，于是就接受了林語堂的邀請結伴兒到了廈門。』（「從廈門解放引起的感想」——「憶魯迅」）

厦門における魯迅

人民文学出版社」と述べているように、林語堂（玉堂）が仲介者となったわけである。それについては語堂自身、この年（一九二六）の春、張作霖が早くも北京に入城したとき、當時の政府は五十名の過激な教授及び「知識分子」の名簿を発表、彼等を逮捕する手筈であった、それら過激な教授の大部分が北京を去るすこし前、私は、君はこれからどうするつもり？と訊ねたが、死んだ振りをする、というのが彼の回答であった、といい、つづいて、……彼は當時勧められて南下し、福建の某大学の中国文学講座を担任した……と述べている。⁽¹⁰⁾

これはいかにも客観的らしく述べてあるが、ともあれ、林語堂自身は当時北京大学英文教授、女子師範大学教務長の職にあったが、前述の逮捕令に含まれる一人であり（「大衍発微」参照）、北京を去って郷里福建の厦門大学教授に赴任した。その間の消息をいささか詳細に知る手掛りとしては、まず「魯迅日記」五月十九日の条に「赴女師大饒別林語堂茶話会」とあり、ついで、七月一日、四日に林語堂からの手紙（厦門発）を受けとり、ついで七月二十八日の条に「収厦門大学薪水四百、旅費百」とみえる。おそらく七月初旬に林語堂を通して厦門大学教授就任の正式な要請があり、これを受諾した魯迅のもとへ二十八日に月給四百元、旅費百元が支給されたことが知られる。

さて、つづいて「魯迅日記」の記述をたどれば、魯迅が北京を発ったのは八月二十六日（この時広州女子師範学校に赴任する許景宋が同行した）、二十九日朝上海着、九月一日夜十二時汽船「新寧」に乗船、二日朝出帆、四日午后一時厦門着、林語堂、沈兼士、孫伏園⁽¹¹⁾らが出迎えた。

厦門大学に赴任した魯迅はまず大学構内の生物学院の三階に住んだ。彼が『這樓就在海辺、日夜被海風呼呼地吹着。』（「厦門通信」——華蓋集続編）と述べている処である。⁽¹²⁾

厦門大学の「開学礼式」は九月二十日に行なわれ、二十五日に魯迅はやはり構内の集美樓⁽¹³⁾に移転した。大学との契

約期間は二年間、授業時間は週六時間（演習二時間、中国文学史⁽¹⁴⁾及び小説史各二時間）であった。但し、この演習「声韻文字訓詁研究」はあまりに専門的で選択する学生がいなかったので開講されなかったという（陳夢韶「魯迅在厦門」）。

かくして、魯迅は厦門大学中国文学系教授兼国学院教授⁽¹⁶⁾となったわけであるが、彼の厦門大学赴任の意図、目的などについて彼自身は『我来厦門、雖是為了暫避軍閥官僚「正人君子」們的迫害。然而小半也在休息幾時、及有些準備……』（「兩地書」一〇二）と述べ、また『……我最初的主意，倒的確想在這里住兩年，除教書之外，還希望將先前所集成的漢畫象考和古小說鉤沈印出。……』（「厦門通信」——「華蓋集統編的統編」）と述べている。さらに林語堂は、魯迅が語ったこととして、彼は厦門大学で二年間學問研究に勵むつもりであり、その著作は大学が出版費を負擔することを當局者がすべて承諾した旨をあかしている（「魯迅」——李何林編「魯迅論」參照）。これらを綜合すれば、魯迅は軍閥官僚「正人君子」輩の迫害から避難し、二年間學問研究に没頭、その著作（これは彼がそれまでに収集した「漢畫象考」⁽¹⁷⁾「古小說鉤沈」⁽¹⁸⁾等を指す）を大学の經費で出版する予定であったことが知られる。

魯迅はそのような意図、目的を抱いて厦門大学に赴任したのであったが、大学の現実は、しかし、必ずしもそれを満してくれはしなかった。というよりもむしろ彼は大学をめぐる環境に徐々に不快をつのらせて行くばかりであった。それを彼は「厦門通信」（「華蓋集統編的統編」）のなかでやや象徴的なたちで述べているが、まず大学の経営等についてやや具象的に「這学校化錢不可謂不多，而並無基金，也無計畫，辦事散漫之至，我看是辦不好的。」（「兩地書」四四）と不満を述べている。さらに、この大学を形容して『我新近想到了一句話，可以形容這學校的，是「硬將一排洋房，擺在荒島的海边上。」』（「全」六六）と述べている。魯迅が感得したこの大学をめぐる不快さは大きくいえば、一つは

大学内の人間関係、二つは学問研究を不如意ならしめる過重な負擔等々であつたと思われる。これに関してはまず厦門大学校長林文慶があげられる。魯迅が『英国籍の中国人』（『海上通信』）と呼ぶこの校長林文慶は、また『此校学生曾起反对校長風潮、後雖平息、而常憤憤、每尋瑕伺隙、与辦事人為難。』（『兩地書』四九）と述べているように、かつて排斥運動の対象となつた問題の多い人物であり、さらに『校長は尊孔的、……但因為化了這許多錢、汲汲要有成效、如以好草喂牛、要擠些牛乳一般。』（『全』五〇）とみえるように尊孔派、つまり孔子教を尊崇する旧派の人物であり、従つて、厦門大学は古めかしい保守色につつまれていたようである。これについては当時青島大学から厦大文科に転校した俞荻が「……可是我還是感到失望、因為我轉学到厦大来的目的、希望能學習一些戰國的豊富的文学的知識、但是這兒所學的是和時代完全不相干的東西、而且還要用文言写文章呢、全校充滿了封建的古旧的習氣……」（『回憶魯迅先生在厦門大学』）『文芸報』一九五六年十月号）と述べていることから察せられる。そのような尊孔派の校長に統率され、全校的に充滿する古めかしいムードに対して魯迅が反撥を感じたことは当然であるが、ここではその一例として大学の週会における魯迅の講演にふれて述べることにする。これについて魯迅は『這里的校長是尊孔的、上星期日他們請我到周会演說、我仍說我的“少讀中国書”主義、並且說学生應該做“好事之徒”⁽²⁰⁾。他忽而大以為然、說陳嘉庚^(福建出身の華僑)也正是“好事之徒”、所以肯興學、而不悟和他的尊孔冲突。这里就是如此胡里胡塗。』（『兩地書』五六）と皮肉まじりに述べている。なお、この魯迅の演說については、俞荻が、厦門大学には毎週一回週会が開かれ、校長林文慶がいつも尊孔的な話をしてしたが、十月十四日に魯迅が演說することになった、その主な内容は『勸青年学生少讀中国古董書、應該做“好事之徒”』であり、これは厦門大学の学生に大きな啓発を与えるとともに復古派の校長林文慶に痛撃を与えた（『回憶魯迅先生在厦門大学』参照）と述べているのが対応する。

さて、前に引用した「兩地書」五〇の具体的な内容を「全」四二と対照すれば、魯迅には授業以外に『教務該当』というのがあり、大学及び国学院季刊への論文執筆、研究員指導、さらに業績発表の要求等々が加重されていたことが知られる。

さらに魯迅をして不愉快ならしめたのは、この大学の同僚教授間の軋轢であつた。それについて彼は『我在這裏不高興的原因、首先是周圍多是語言無味的人物、令我覺得無聊。』（「兩地書」五四）と述べ、また『人間的糾葛眞多……。』（「全」五三）と述べている。ここにみえる「話の面白くない連中」「人間關係の葛藤」というのは、彼がまた『……從此現代評論色彩、將瀰漫厦大。……這裏的国学院卻弄了一大批胡適之陳源之流、我覺得毫無希望。』（「全」五六）と述べ、さらに『「現代評論」派的勢力、在這裏我要膨漲起來、當局者的性質、也与此輩相合。』（「全」五八）と述べているように、厦門大学の国学院が彼の論敵である「現代評論」派に連らなる輩に占有されつつある現状からの發言である。そもそも魯迅が北京を去つて厦門へ来たのは彼自身が前引の「兩地書」一〇二にも明言しているように「正人君子」達、つまり「現代評論」派の『迫害から暫らく避難』するのが一つの理由であつた。その「現代評論」派がいまやこの大学の国学院に徐々に勢力を伸張、学校当局も彼等を受容しつつある現状においては魯迅が『この国学院は胡適之、陳源一派で固められ、全く希望がもてません』というのも当然という外はない。それらの人物の最右翼としては朱山根（顧頡剛）があげられる。魯迅は『朱山根は胡適之的信徒、……他們面目倒漂亮的，而語言無味、……』（「兩地書」四二）と批判しているが、彼等が魯迅を排除しようとする傾向については陳夢韶が『顧頡剛等人、他們常在背後排斥魯迅先生、罵魯迅先生是「名士派」、給他「刺激」、給他「為難」。魯迅先生說、「朱山根已經知道我必走，較先前安靜得多了。」』（「兩地書」九六）他們排擠魯迅先生、以為魯迅先生一去、国学院便

厦門における魯迅

「清一色」、是他們的天下了。」（「魯迅在厦門」）と述べているのが参照されよう。

さて、前述のような厦門大学の環境の中で魯迅はひたすらに『閉門主義』をとり、こつこつと文学史講稿の編定などに専念した。しかし、それとても『可惜本校藏書不多，編起来很不便。』（『全』五〇）であつた。

その頃のことを魯迅は次のように回想している。『記得還是去年躲在厦門島山的時候，因為太討人厭了，終於得到「敬鬼神而遠之」式的待遇，被供在圖書館樓上的一間屋子裏。……前面則海天微茫，黑絮一般的夜色簡直似乎要撲到心坎裏。我靠了石欄遠眺，聽得自己的心音，四遠還彷彿有無量悲哀，苦惱，零落，死滅，都雜入這寂靜中，使牠變成藥酒，加色，加味，加香。……』（「怎麼寫」——「三間集」）「自分の心臓の鼓動が聞える」ような寂寥のなかに孤独を噛みしめる魯迅の心情が察せられよう。

なお、この孤独寂寥が魯迅を回想に向わせ、後に「朝花夕拾」に収めた作品を書かせたことについて劉泮溪らは『現實的蕪雜狀態使他看了很難過，整天面對大海或翻看古書，四近毫無生氣自不免感到孤独寂寥，便開始了生活的回憶。北京未名社正在此時向他催稿，他便寫下了一些回憶童年生活的散文，后收入「朝花夕拾」。』（「魯迅研究」、作家出版社）と述べている。魯迅が厦門へ行ったのは八月末であり、それ以降に書いた作品（「朝花夕拾」）としては「從百草園到三味書屋」（九月十八日）「父親的病」（十月七日）「瑣記」（十月八日）「藤野先生」（十月十二日）「范愛農」（十一月十八日）の五篇である。従つて、魯迅の回想をもつばら『童年生活』に限定するのは厳密にいえばいささか早計に過ぎる嫌いがある。

ついで、「年譜」には『九月彷徨印成。』とみえる。「彷徨」は「吶喊」につづく彼の第二創作集であり、「祝福」から「離婚」まで計十一の短篇（一九二四—二五）が収録され、「烏合叢書之一」として北京北新書局から出版した。

なお、翌一九二七年七月出版の「野草」に収録した計二十三篇の散文詩の中、最後の二篇、「淡淡的血痕中」「一覺」はそれぞれこの年の四月八日、十日、つまり、山本病院に避難中に書かれた⁽²³⁾。

さて、前述の孤独寂寞の中で魯迅の胸中を去来したさまざまな感慨のうちここで特記すべきは教師と作家その他生活の岐路の問題である。

(2) 生活の岐路

魯迅はこの教師と作家の問題について次のように述べている。『但我對於此後の方針，實在很有些徘徊不決，那就是：做文章呢，還是教書？因為這兩件事，是勢不兩立的：作文要熱情，教書要冷靜。兼做兩樣的，倘不認真，使兩面都油滑淺薄，倘都認真，則一時使熱血沸騰，一時使心平氣和，精神便不勝困憊，結果也還是兩面不計好。』（「兩地書」六六）

つまり、教師と作家は結局は兩立し難いとしていたのであるが、さらに続けて『但我想，或者還不如做些有益的文章，至於研究，則于余暇時做，……』と述べている。つまり、教師、學問研究よりも作家への傾心である。さらに、別のところでは『我明年的事；自然是教一点書，但我覺得教書和創作，是不能並立的，近來郭沫若郁達夫之不大有文章發表，其故蓋亦由于此。所以我此後的路還當選擇：研究而教書呢，還是仍作游民而創作？倘須兼顧，即兩皆沒有好成績。或者研究一兩年，將文學史編好，此後教書無須預備，則有余暇，再從事于創作之類也可以。』（「企」八六）と述べている。これもまた所詮兩立し難い教師と作家の岐路に思い惑う魯迅、すべてに誠実、細心であるいかにも魯迅らしい感懷の吐露と読みとれる。なお、ここで見逃しえないのは『作游民而創作』の一句である。つまり、游民（浪

人」と創作の結びつきであるが、これについては、たとえば魯迅自身が『……在中国、小説不算文学、做小説的也決不能稱為文学家、所以並沒有人想在這一條道路上出世。』（「我怎麼做起小説來」——「南腔北調集」）と述べていることが参照される。もつともこれはその前に『当我留心文学的時候』とあつて必ずしも現況そのものではないが、しかしその傾向は依然として続いており、当時はまだいわゆる作家生活を成立せしめる條件はととのつておらず、それを不備なかたちにもせよ最初に可能ならしめたのが魯迅であつたことも見落してはならない。⁽²⁴⁾

次に、魯迅がその寂寞の中に聞いた『自分の心臓の鼓動』を告白的なたちにおいてとらえれば、それはやがて妻たるべき許景宋に対する愛情の表白にまでつらなるといえよう。魯迅と許景宋の間に徐々に深められて行く愛情傾斜のプロセスは「兩地書」がなよりの証しとなるが、魯迅の孤独寂寞のせめてもの慰めが許景宋の幻であつたろうことは想像に難くない。いまや魯迅は来し方、行く末を思い『遲疑于此后所走的路』のである。彼は、かくて今後の生活の路として『(一)死し心、積幾文錢、將來什麼事都不做、顧自己苦苦過活；(二)再不顧自己、為人們做些事、將來餓肚也不妨、也一任別人唾罵；(三)再做一些事、倘連所謂「同人」也都從背後槍擊我了、為生存和報復起見、我便什麼事都敢做、但不願失了我的朋友。』という三条をあげ、そのいずれを択ぶべきかを許景宋に問ひかけ、最後に『給我一條光。』（「兩地書」七三）と呼びかけるのである。なお、この書信の日付は十一月十五日であり、十二日付の許景宋の書信には彼女が毛絲の背心チンキを編みはじめ、出来上り次第送る旨が記されてあり、「魯迅日記」二十九日の条にそれを受領した旨が記されている。これは極めてささやかな事例の一つにすぎないが、魯迅と許景宋の愛情がすでに定着しつつあつた証佐ともうけとれよう。

この魯迅と許景宋の愛情は、しかし、なんらの障害もなく順調に進展したわけではもちろんない。その過程にはい

ささかの紛糾めいたことがあり、その詳細は必ずしも充分に解明されてはいないが、それをも含めて魯迅の決定的な愛情の告示として次の一節をあげる。

『這是你知道的，單在這三四年中，我對於熟識的和初初相識的文学青年是怎麼樣，只要有可以尽力之處就尽力，並沒有什麼壞心思。然而男的呢，他們自己之間也掩不住嫉妒，到底爭起來，一方面于心不滿足，就想打殺我，給那方面也失了助力。看見我有女生在座，他們便造流言。這些流言，無論事之有無，他們是在所必造的，除非我和女人不見面。他們大抵是貌作新思想者，骨子里却是暴君，酷吏，偵探，小人。如果我再隱忍，退讓，他們更要得步進步，不會完的。我蔑視他們了。我先前偶一想到愛，總立刻自己慚愧，怕不配，因而也不敢愛某一個人，但看清了他們的言行思想的內幕，便使我自信我決不是必須自己貶抑到那麼樣的人了，我可以愛！』（『兩地書』一一二）

この書信の日付は翌年の一月十一日であるが、魯迅と許景宋の愛情を考える上にも重要な一つの關鍵となる。魯迅は、この引用の初めにもその一端が窺われるが、從來ほとんど無条件に青年を信じ、その育成に自己犠牲的な誠意を傾けて来た。それはかつて彼が吸収し、信条ともして来た進化論に対する素朴ともいえる信頼感が根柢にあった。そのような信頼感の挫折は勢い彼の進化論からの脱皮を余儀なくさせる。魯迅の、いわゆる進化論から階級論へという図式はすでに定説化しつつあるが、その転機における、これは重要な背景の一つとみて差支えない。ともあれ、この引用にみえる、流言をとばして魯迅を中傷する彼等というのは、たとえば曾敏之も『指高長虹等の玩弄手段』（『魯迅在広州』）と註しているように、高長虹⁽²⁵⁾らを指すこというまでもない。それはまた先の引用につづけて『那流言，是直到去年十一月，從韋素園的信里才知道的。他說，由沈鐘社里聽來，長虹的拚命攻擊我是為了一個女性，「狂飈」上有一首詩，太陽是自比，我是夜，月是她。他還問我這事可是真的，要知道一点詳細。我這才明白長虹原來在害」單相

厦門における魯迅

思病”以及川流不息的到我這里来的原因，他並不是為「莽原」，却在等月亮。但對我竟毫不表示一些敵對的態度，直待我到了厦門，才從背後罵得一個莫名其妙，真是卑怯得可以。我是夜，則当然要月亮的，還要做什么詩，也低能得很。那時就做了一篇小說⁽²⁷⁾，和他開了一些小玩笑，寄到未名社去了。』（「全」）と述べていることから明確である。そもそも魯迅と高長虹の軋轢の発端はこの年（一九二六）の下半期「莽原」の編者韋素園が向培良の原稿を未発表にしたことにある。長虹はそれを理由に韋素園らを攻撃、ついで北京脱出後の魯迅に対して中傷的な言辞を弄しながら、一方では魯迅の名を彼等の「狂飈運動」に利用、かくて魯迅もついに反撃に転じたわけである。極めて大まかにいえば、現象的にはそのような経緯であるが、その根源には魯迅の表現をかりれば高長虹の許景宋に対する『單相思病』（片想い）が介在したようである。なお、それについては、高長虹の詩「給」⁽²⁸⁾に対して魯迅は『三，是他眞疑心我破壞了他的夢，——其實我並沒有注意到他做什么夢，何況破壞——因為景宋在時，確是常來我寓，並替我校對，抄寫過不少稿子（墳的一部分，即她抄的）這回又同車離京，到滬後她回故鄉，我來厦門，而長虹遂以為我帶她到了厦門了。倘這推測是真的，則長虹大約在京時，對她有過各種計畫，而不成功，因疑我從中作梗。……』（「魯迅書簡」上冊）と述べているが、これもその間の消息を明らかにする資料の一つであろう。さて、おそらく魯迅としても許景宋に対する感情には微妙複雑なものがあつたと思われる。景宋がかつて彼の学生であつたということ、さらに彼に終生つきまとう暗い翳となつた名のみの妻朱安のこと等々、『我先前偶一想到愛，總立刻自己慚愧，怕不配，因而也不敢愛某一個人，』⁽²⁹⁾というのは、それらを含めての魯迅の心情の吐露と読みとれはしないだろうか。しかし、いまや、それらをふまえた上で彼はあえて『我可以愛！』⁽³⁰⁾と言いつつたのである。逆説的にいえば、魯迅のこの決定的な愛情の表白を早めたのが高長虹らの策動であつたともうけとれよう。

(3) 辭職

さて、前述したような厦門大学の環境のなかに彼がいたずらに手を拱ねて安住しうるわけではない。悪劣な環境からの脱出はこれまでの彼の生き方の上にくたびかあった。彼が許景宋にあてて『至于我下半年那里去，那是不成問題的。上海，北京，我都不去，倘無別處可走，就仍在這里混半年。現在去留，專在我自己，外界的鬼祟，一時還攻我不倒。我很想嘗嘗楊桃，其所以熬着者，為己，只有一個經濟問題，為人，就怕我一走，玉堂立刻要被攻擊，因此有些彷徨。……』〔兩地書六四〕と書いたのは十月十九日である。ここで『經濟問題』というのは主に北京に残してきた家族（母及び妻朱安）への送金及びその後の生活などを指すのであろう。また、玉堂云々については、彼が厦大を去れば朱山根（顧頡剛）らの圧力が彼の推薦者である林語堂（玉堂）に加重されるのを懸念しているわけである。その前後に、魯迅には広州の中山大学へ転出の意向があった。いま、その経過のあらましを『兩地書』等によつてたどれば、まず、中山大学長朱家驊から厦大の沈兼士、林語堂、魯迅あてに援助を求める電報がすでに十月十六日に来ており（五六）、ついで、許景宋にあてた十一月一日の書信には『……如果中大定要我，我到後于学校有益，那我就于開學之前到那邊去。此處別的都不成問題，只在对不起玉堂。』（六六）と、中大（中山大学）への転出にかなり積極的に意向をあかし、ついで十一月七日の書信には『……其實我也還有一點野心，也想到廣州後，对于「紳士」們仍然加以打擊，至多無非不能回北京去，並不在意。第二是与創造社联合起来，造一条戰線，便向旧社会進攻，我再勉力写些文字。』（六九）と、広州行を前提として『現代評論』派との論戰及び創造社との統一戰線⁽²⁹⁾についての意向をあかしており、翌八日の書信には『昨夜玉堂来打聽広東的情形，我們因勸其將此處放棄，明春同赴廣州。』（六九）

厦門における魯迅

と、林語堂に対して広州行を勧誘している。なお、「魯迅日記」十一月十一日の条に「上午得中山大学聘書……五日発。」とみえ、ついで、十一月十八日の書信には「……總之無論如何、年假中我必到広州走一遭、即使無噉飯處、厦門也決不住下去了。」（七五）と述べ、二十日の書信には「……我決計至遲于本學期末（陽曆正月底）離開這里、到中山大学去。……只要不在不死不活的空氣里就好了。我想我還不至于完在這樣的空氣里、……」（七九）と、明確に広州中山大学への転出をあかしている。なお、魯迅のこの転出については、すでに同大学の『助教』に内定していた許景宋の慫慂があったことも「兩地書」によってあきらかである。

かくして、中大委員から十五日付正式決定の來信があり（「兩地書」九八）、十二月三十一日に魯迅は正式に辭表を提出して厦門大学を辭職した。「年譜」に「十二月因不滿於學校、辭職。」とみえるのがそれである。魯迅の大学に對する「不滿」はこれまでも述べて來たが、彼が瞿永坤にあてた書信の一節に「學校是一個秘密世界、外面誰也不明白內情、據我所覺得的、中樞是「錢」、邊着這東西的是爭奪、騙取、關籠、猷媚、叩頭。沒有希望。」（「魯迅書簡」上冊）とみえるのがその最も集約的な表明と読みとれる。そして、それはまた魯迅の同僚であつた羅常培が「在他將去広州時、厦大校長給他錢行、當時還有些個資本家在座。校長介紹其中一個說：「某某先生是我們董事。我們私立大學不管別的，誰捐錢誰就可以作董事。」魯迅先生豪不猶豫地從口袋裏掏出兩毛錢來往桌上一拍，說：「我捐兩毛錢也可以作董事嗎？」這又是他一次有言的抗議。」（「從厦門解放引起的感想」——「憶魯迅」）と述べる、送別会における紛糾の一齣によつても明らかである。

ともあれ、魯迅の辭職を「魯迅日記」に参照すれば十二月三十一日の条に「辭厦門大学一切職務。」とみえるのがそれにあたる。

この年（一九二六）九月四日、厦門大学に赴任して以来、ほぼ四カ月である。

なお、ここでのいささか順序が前後するが、魯迅の厦大赴任以来、学生間に高まった文芸運動の結果として、鼓浪社が誕生、魯迅もこれに援助を惜しまなかったこと等に触れておく。これについて俞荻は『……十一月間、草綠色封面的、精致可愛的「波艇」月刊創刊号、终于在魯迅的支持下出版了。』と述べ、ついで『……「鼓浪」周刊也是由魯迅先生寄稿、改稿的一個小型的文芸刊物。這是附在「民鐸日報」副刊上出版的……』（「回憶魯迅先生在厦門大学」）と述べている。この魯迅を媒体として厦門大学の学生間に高まった文芸運動の波は、魯迅の辭職後における学内の紛糾混乱にまで波及した。それについて俞荻は、許景宋の「欣慰的紀念」の一節『……幸而他好像青年的吸鉄石，自他到后，厦門大学研究文芸之風盛行起来了，冷清清的大房間里時常有学生的足迹不断来往，就在他離校之際，還引起青年的覺悟，改革学校運動于是發生……』を引用して、當時の眞實を伝える敘述であると認めている。それは魯迅もあかしているように学生の慰留運動が一転して改革運動に發展したのであるが、その経過を「兩地書」の記述によつてたどれば、あらまし次の如くである。

まず、一月二日に学生会代表が慰留のため來訪（全二〇四）、以後学生の動きが激しくなったが、魯迅は一月六日付の書信のなかで『校内大約要有風潮，現在在醞釀，兩三日內怕要爆發。這已由挽留運動轉為改革学校運動，本已与我不相干，……』（一〇九）と述べており、その改革運動の前途については、つづけて『……這裏的惰氣，是積四五年之久而瀰漫的，現在有些学生們想藉我的四個月的魔力來打破牠，我看不過是一個幻想。』とかなり悲觀的な見解を洩らしている。この学生の改革運動に対して校長林文慶が、魯迅が「到厦門，原是來搗亂，並非予備在厦門教書的，所以北京的位置都是沒有辭掉。」（魯迅「海上通信」——「華蓋集續篇的續篇」）と語つたという、この罵倒はおそらく

厦門における魯迅

周章狼敗の失言とうける。ともあれ、魯迅はその運動は『本已与我不相干』と述べたあと、「那是一定又有人歸罪于我，指為「放火者」，然而也只得「聽其自然」，放火者就放火罷。」と述べている。魯迅の厦大辭職をめぐる波乱の一端が窺われよう。

なお、ここで附言すれば、魯迅はこの年十一月二十七日に集美学校で講演を行なっている。この講演の内容等についての詳細は未詳であるが、魯迅自身「……先前、那校長葉淵定要請国学院里の人們去演説，……第一次是我和語堂。……我説的是照例的聰明人不能做事，因為他想来想去，終於什麼也做不成等類的话。」（『海上通信』）「華蓋集統篇」）と述べていることによってその一端が窺われよう。

さて、そのようななかで、翌一九二七年一月四日、厦門大学全学生の送別会及び文科送別会がもたれ、ついで、魯迅は一月十五日「蘇州号」に乗船、見送りにかけつけた王方仁、崔真吾、洪学深らの学生及び矛盾⁽³²⁾らと握手を交わし翌十六日午后広州へ向けて出発した。

(三) 結語

以上ほぼ四カ月にわたる魯迅の厦門大学における経過のあらましを述べたが、ここでその要点を振りかえってみれば、「三・一八」惨案以後いよいよきびしさを加える弾圧を逃れて厦門大学に赴任した魯迅には、少くとも以後の二年間、「漢画像考」「古小説鉤沈」等の整理出版を含めて学問研究に没頭しようという期待があった。しかし、その期待は厦門赴任以後いくばくもなくして所詮画餅にすぎないことを知らされた。厦門大学で彼を待ちうけていたのは

彼に対する過大な要求と同僚間の不快な軋轢等々であり、それらを含めて大学の『空氣惡劣、当然不願久居、』（『兩地書』七三）という狀況であつた。そのような不快な環境に対して魯迅はつとめて外部との交渉を避けて『閉門主義』（『全』五〇）を採用し、ひたすら孤独の中に沈潜しようとしてつとめた。その孤独寂寥のなかで彼は教師と作家の岐路に迷ひ、また、彼が従来育成しようとした青年に対する殆んど絶對的ともいえる信頼感の挫折、さらには許景宋に対する愛情の問題等々に直面したが、ともあれ、その『閉門主義』もさしたる効はなく、廈門大学に瀰漫する『惰氣』（一〇九）は逃るるすべもなく、またそれは魯迅にとつて『死海』（一〇五）にさえ等しいものであつた。そのような劣惡な環境に処した魯迅のとるべき路はそこからの脱出以外にはない。それはこれまでの魯迅の生き方の上にしばしばその例をみるところであるが、この場合はかつての日本留學時代における仙台からの脱出が対照されよう。彼の廈門脱出については前述のような内部的な事由のほかに、その頃の『兩地書』にもしばしば語られているように、國民革命軍の北伐に應ずる南方各地における革命軍の蜂起等々の政治情勢の波が外からの声として彼を刺激したと思われる。具象的にいえば、それは「現代評論」派との論戰及び「創造社」との統一戰線結成の志向などがあげられよう。さらに、やがて妻たるべき許景宋に対する愛情の傾斜、定着もやはり彼の決意を促す内部的な因素の一つであつたとみられる。魯迅の廈門滞在はほぼ四カ月の短期間ではあつたが、それらもろもろの経緯をふりかえれば、彼の人生行路におけるかなり複雑、重要な時期であつたとみなければならぬ。

終りに、魯迅の廈門脱出は最終的にはやはり彼の自主的判断によつて決行されたのであり、その意味では、陳夢韶が『魯迅先生離開廈大、雖是和顧頤剛等人有關、但是去留還是全由他自己作主、並不是對方有什麼力量、能够排擠他、攻倒他的。』（『魯迅在廈門』）と述べる、魯迅の主体性、自律性に対する評價はやはり正当であらう。

厦門における魯迅

- (1) 易培基——湖南長沙の人。かつて章炳麟とともに革命運動に活躍、一九二二年以来、広東大学教授、教育総長等を歴任、段祺瑞政府による逮捕令(後述)に指名された一人である。
- (2) この死傷者については魯迅は「執政府前開排槍、打死請願者四十七、傷百余……」と述べ、また、「無花的薔薇之二」の註には「死者四十七人、傷者百五十余人」(『魯迅全集』3巻・人民文学出版社版)とみえる。
- (3) その時の悲惨な状況については、その日現場にかけつけて目撃した許寿裳(北京女師大教授)の「三一・一八惨案」(『亡友魯迅印象記』)があり、また魯迅の「記念劉和珍君」(『華蓋集統編』)にも記述がある。
- (4) その氏名は、徐謙(中俄大学長)、李大釗(北京大学教授)、李煜瀛(北京中法大学長兼清室善後委員長)、易培基(女子師範大学長)、顧兆熊(北京大学教務長)らである(『可慘与可笑』——『華蓋集統編』)。但し、『魯迅全集』3巻(人民文学出版社)所収『可慘与可笑』の註には「三一八惨案発生の当日、段祺瑞政府下令通緝徐謙等五人。」とみえる。
- (5) 『可慘与可笑』による。なお、逮捕令を発せられた総計四十八名の氏名、原籍、職業などすべて「大衍発微」に記録されている。
- (6) 林辰は「魯迅北京避難考」(『魯迅事蹟攷』)において、魯迅の『離寓時期』を四月中旬に、『回寓』を五月中旬と推定しているが、それぞれ訂正さるべきである。なお、林辰は魯迅の避難期間の生活を詳説したものととして、艾雲「魯迅先生避難在北平」(『新華副刊』)をあげている。その期日などかなり曖昧であるが、参考までにその一部を抄録する。『魯迅最初是北京西城什錦坊街九十六号莽原社、住到第三天、突然有幾個不相識的青年來訪、魯迅疑心他們是偵探的改裝、便於第四天早晨、裝成病人、遷往石駙馬大街的山本醫院。四五天後、又遷往東交民巷的德國醫院。在這裏、他真的害起腸胃病來了、……病愈後、由病房遷入一間大房子、与其他避難的教授們同住。這時、忽然有人伝來了可怕的消息、說當局正計畫搜查被緝的教授們的家庭。魯迅很為着急、他怕露擾了高年的母親、便託人將老太太和太太接出寓所、到一家旅館內去躲避。幸而搜查的事並沒有實行。後來因為德國醫院不願無病的人在院多住、魯迅們只得又搬到法國醫院去了。過了些時、緝捕搜查的風聲漸趨沈寂、魯迅又因為避難已借貸數百元、經濟無法支持、便於五月中的一個早晨、回到西三條胡同二十一号的本寓去了。』
- (7) 中国大学には五月三十一日付で統講辞退の手紙を出している(『魯迅日記』)。
- (8) いささか話柄めくが、魯迅をノーベル文学賞に推薦する話があった時(一九二七年九月十七日付台静農からの書信)、彼はそれを辞退する理由の一つとして、この小説の作者ウァ

ン・エーデンすら受賞していないことをあげている（九月二十五日付返信）。

- (9) 向培良—湖南省黔陽の人。狂飢社の要人。北京時代は親しく魯迅に師事していたが、魯迅が厦門へ行つて後、たまたま彼の原稿が「弄原」と「狂飢」の衝突のきっかけとなり（後述）、以後魯迅と断絶した。

- (10) 林語堂のこの記述は“China Critic, December, 1928”に發表されたが、いま光洛訳「魯迅」（李何林編「魯迅論」）による。

- (11) 沈兼士は北京大学国文系教授、女子師範大学教授、孫伏園は北京大学講師、「京報副刊」編集者であつたが、それぞれ逮捕令に列挙されている。つまり、魯迅より先に北京を去つて厦門大学に赴任していたわけである。

- (12) この生物学院は中日戦争で厦門が陥落したとき日本軍に破壊され、いまわずかにその基址が残っているだけであるという（陳夢詔「魯迅在厦門」）。因みに陳夢詔は当時厦大教育科学生であつた。

- (13) この集美樓については魯迅自身「答有恒先生」（「而已集」）及び「兩地書」六にそれぞれ記述しているが、なお、魯迅の居室は現在「魯迅紀念室」になっているという（陳夢詔「魯迅在厦門」）。

- (14) この中国文学史は「漢文学史綱要」（いま「魯迅全集」8

北大文学部紀要

卷、人民文学社版所収）と略同じであり（陳夢詔「魯迅在厦門」参照）、また許景宋も「……漢文学史綱要、雖為在厦門大学及中山大学的講義稿……」（「研究魯迅文学遺產的幾個問題」）「欣慰的紀念」と述べている。

- (15) この小説史はかつて北京大学等で講義し一九二三—二四年に出版された「中国小説史略」である。

- (16) 「魯迅日記」十月十日の条に「午後開国学研究院成立会。」とみえる。

- (17) 魯迅が編印する予定であつた美術考古の専門書。彼は従来漢魏六朝の石刻の畫象、図案を搜集、研究して「六朝造象目錄」という書（未印）を完成したが、漢畫象の部分は完成していなかった（「厦門通信」三）「魯迅全集」3卷、人民文学社版の註による）。

- (18) 周代から隋代までの散佚した小説三十六種を輯録。後一九三八年出版の「魯迅全集」に収録（全上）。

- (19) 林文慶—字は夢琴、福建省海澄の人。英国エジンバラ大学卒、香港大学名誉医学博士、厦門大学校長兼国学院院長。著書に英訳「離騷」（商務印書館）がある。

- (20) これは魯迅がその前年（一九二五）「京報副刊」の求めに応じたアンケート「青年必読書」（「華蓋集」所収）にもみえる。

- (21) これについては、同年十月二十三日出版の「厦大周刊」第一六〇期に掲載された演説の大意が、いま「魯迅全集」9卷

厦門における魯迅

(人民文学社版)「両地書」二集の註に記録されている。なお魯迅のこの演説の中、「少説中国書」の部分については、明らかに尊孔の校長の見解と衝突するので「厦大周刊」に記録がないのであろう、とみえる。

(22) 「魯迅日記」十月十四日の条に「……上午往週会演講三十分時……」とみえる。

(23) ここで魯迅がこの年に発表したものの(本文に記述したもの以外)をとりまとめ記録する。まず一月に「論費厄潑頼応該緩行」(前年十二月二十九日作、「莽原」第一号に発表、「墳」所収)、二月に「狗・猫・鼠」、三月に「阿長与山海経」、五月に「二十四孝図」、「五猖会」、六月に「無常」(以上「朝花夕拾」所収)、厦門行以後の五篇については本文参照。六月に雜文集「華蓋集」(北新書局)、八月に「小説旧聞鈔」(全等であり、なお、十一月に「写在『墳』後面」(「墳」所収)を書いた。「魯迅全集」10巻、人民文学社版所収の「魯迅著訳年表」参照)。

(24) 許寿裳は「懷亡友魯迅」(「魯迅的思想与生活」—台湾文化協進会発行)に「経済的窘迫」の一項をあげ、魯迅の作家としての生活を支える印税、原稿料等について『但是版税苦放収不起、売稿也很費力……』と述べ、さらに彼が晩年D医師に処方箋を頼まず、転地療養をためらったのも、大半は経済的な圧迫のためであった旨をあかしている。

(25) 高长虹「魯迅伝覚書」(北大文学部紀要12)註(78)参照。

(26) この詩は「狂飜」周刊第7期(一九二六年十一月二十一日)に発表された。いま「魯迅全集」9巻(人民文学社版)の註47に収録されている。

(27) この小説は「故事新編」に収録した「奔月」である。その背景等については「魯迅全集」2巻(人民文学社版)註8に詳しい。

(28) これは註(26)の詩である。

(29) 郭沫若「創造十年統篇」(「革命春秋」)によれば、郭沫若、郁達夫は広州中山大学に赴任するため「三・一八」の日に上海を発ち、二十三日広州に着いた。成仿吾はそれ以前にこの大学に着任しており、さらに創造社同人穆木天、鄭伯奇らも広州へ集結。かくて、広州、汕頭に創造社の分社が出来た。魯迅の、創造社との統一戦線というのは、そのような背景からの発想であつたろうが、しかし、魯迅が着任した時は、郭沫若はすでに広州を去り、北伐軍に参加していた。因みに、魯迅、郭沫若の二人はいい会うべくして最後までその機会をもたなかった。

(30) この書信の日付は翌一九二七年一月十二日である。なお、瞿永坤は河南省信陽の人。当時北京政法大学生であった。

(31) 「波艇」の編集者は学生の崔真吾、王方仁、俞念遠、謝玉生らで、魯迅もこの月刊の編集をし、さらに、上海の北新書局

を紹介して印刷、発行を代行させた。一九二六年冬二期を出した後、魯迅及び編集責任の学生が厦大を去ったので停刊
〔魯迅全集〕9巻、人民文学社版、註28参照。因みに、「故事新編」収録の「鑄劍」（この年十月作）は「眉間尺」という題名で、この創刊号に掲載された。

(32) 林辰「魯迅演講斃年」〔魯迅事蹟攷〕には×月とあるが「魯迅日記」を参照すれば十一月二十七日である。

(33) 以上の氏名は「魯迅日記」一九二七年一月十五日の条による。なお、矛盾は、本名章廷謙、筆名川島、厦門大学国文学研究出版部幹事兼図書館編輯であった。因みに、陳夢韶「魯迅在厦門」には「魯迅先生和送行的二十多位同事学生，一一握別。」とみえる。

附記・本稿は「魯迅伝覚書」〔北大文学部紀要〕12）に続く一篇である。なお、ここでは作品の短評など割愛した。

故猪俣庄八教授著訳目録(稿)

- 平話への一里塚 「中国文学月報」三二号。一九三七年十一月。
林語堂「好萊塢談」 (翻訳) 「中国文学月報」三四号。一九三八年一月。
冰心「超人」 (翻訳) 「中国文学月報」三八号。一九三八年五月。
葉紹鈞「古代英雄の石像」 (翻訳) 「中国文学月報」五一号。一九三九年六月。
「弓の名人譚」 (列子) (翻訳) 「中国文学月報」五三号。一九三九年八月。
郁達夫「五四文学運動の歴史的意義」 (翻訳) 「中国文学月報」五四号。一九三九年九月。
蕭軍「初夜」 (翻訳) 「中国文学月報」五六号。一九三九年十月。
葉紹鈞「稻草人」 (翻訳) 「春桃」一九三九年。
老舍「大悲寺外」 (翻訳) 「蠶」一九三九年。
郭沫若「創造十年」 (翻訳) 一九四〇年一月。東成社。
支那言語学概論 (金坂博共訳) 一九四一年十月。三省堂。
「葬花のことなど」 「中国文学」九三号。一九四六年三月。
沈從文「郭沫若論」 (翻訳) 「中国文学」九六号。一九四六年

六月。

- 編集後記「中国文学」九六号。一九四六年六月。
傅東華「中国文芸の十年」(一) (翻訳) 「中国文学」九五号。一九四六年五月。
傅東華「中国文芸の十年」(二) (翻訳) 「中国文学」九七号。一九四六年七月。
紅樓夢の悲劇 「桃源」創刊号。一九四六年十一月。
魯迅精神の継承 「明日」一九四八年。
中国小説論ノオト 「桃源」二・三月号。一九四九年二月。
ある時期の郭沫若 「中国語雑誌」一九五〇年。
放浪する文学の鬼 「北大季刊」一九五一年十月。
曹霑の伝記的素描
中国白話小説に関するノオト
——白話短篇小説の展開——
魯迅伝覚書
——日本留学時代を中心として——
「中国小説の歴史的変遷」(魯迅)について
——その補訂を中心に——
「東京支那学報」六。一九六〇年六月。

魯迅伝覚書

北大「文学部紀要」九。

—その沈潜期を中心として— 九六一年三月。

漢宮秋

「中国の名著」一九六一年十月。

魯迅伝覚書

—「狂人日記」発表から女師大事件まで—

北大「文学部紀要」十二。

一九六四年三月。
「西遊記」あらすじ 「中国の八大小説」一九六五年六月。

魯迅・ロラン・ノーベル賞 「みずす」一九六八年六月。

魯迅伝覚書 (遺稿)

—厦門における魯迅—

北大「文学部紀要」十七ノ
二 一九六九年